

中外雑記

臨黄

徳源寺が震災救援托鉢

●妙心寺派 徳源寺専門道場（嶺興嶽師家）は二十四日から二十六日までの三日間、兵庫県南部地震被災者救援の募財托鉢を行なった。雲衲十人前後が午前八時過ぎから昼前まで、徳源寺周辺やＪＲ千種駅から今池にかけて募財の趣旨を記した幟を掲げ連鉢したもの。集められた浄財は地元紙の義援金窓口へ寄託した

▽「(大震災という非常事態に対し) どうも我々の宗派は動きが遅い。何もできないようでは情けない、と考え、托鉢をすることにした。被災地から遠く離れた私たちがまず初めにできるのは、こうしたことでしょう。懐にあるお金を出せばそれで済む問題じゃない。こういう場合はとにかく動かなければ」と嶺師家。なお、托鉢は取りあえず三日間続けた後、間をおいて再開しある程度の期間継続する方針という

▽兵庫県南部地震では五千人を超える死者が出たため、犠牲者の火葬は神戸市内やその周辺の火葬場だけでは到底、対応できない状態になっている。遠く名古屋まで遺体が搬送されているケースもあるようだが、大阪の高槻市火葬場でも震災犠牲者の火葬を執り行なっている葛葉睦山桂香寺住職が会長を務める高槻仏教会でも役員や理事、会員の一部が二十一日から火葬への出仕をしているとのこと

▽京都だるま寺・法輪寺（佐野大義住職）で二月二～四日の三日間、恒例の節分会を開催するが、今年は特に阪神大地震救援の墨跡即売展を開催。佐野住職の墨跡、禅画を展示即売した収益金をＮＨＫ厚生文化事業団を通じ兵庫県に寄託する予定

常休寺なども大被害

●黄檗宗 宗務本院は十九日現在で各教区寺院における震災被災状況をまとめた。これによると、本山では開山堂の白壁に亀裂が入り、一部が剥落、天王殿四天王の持ち物が破損、典座東司の壁が脱落するなどの被害があった。一部に未調査部分を残すが、本院が調べた末寺の被害は次の通りである

▽塔頭教区＝被害軽微。第十教区＝被害軽微のもよう。第十一教区温泉寺（大野重顕住職、神戸市北区）＝本堂薬師如来倒壊、仏像、仏具も壊れ散乱。庭園の石塔、墓石が全て倒壊。庫裡屋根瓦が半分脱落、鐘楼半壊、など。同明光寺（岩田義隆住職、同須磨区）＝境内の地藏尊、墓石全倒壊。崖崩れ、屋根もずれる。同常休寺（普喜正弘住職、伊丹市）＝山門倒壊。鐘楼全壊。本堂もねじれて全壊同様。石塔、墓石も全倒壊。同国清寺（直原玉青住職、三原郡西淡町）＝開山堂壁脱落、文殊菩薩倒壊、新添仏具全壊。第十二～十五教区＝被害軽微のもよう

▽宗務本院財務部は兵庫県南部地震救援募金の窓口を設けた。郵便振替で、口座番号〇一〇三〇・二・九四〇九、黄檗山萬福寺

▽第八十四次定期宗会が二月二十一日から二十四日までの四日間、宗務本院に招集される

▽森本信光獅子林院住職の遷化後、全日本煎茶道連盟事務局長は空席になっていたが、一月から宗務本院の山本智玄化主が事務局長見習いとして執務している。

曹洞

一千万円をNHKに

▽兵庫県南部地震の被災寺院に対し宗務庁がプレハブの提供を独自に決定したことは注目される。すでに被災寺院十五カ寺から提供の申し入れが入っており、現地に事務所をもつ戸田建設が設置作業を請け負った。プレハブは二間四方（八畳分）の大きさ。鍵がかかりテントより安全性が高いため、思い切ってプレハブの導入を決定したと伊東盛熙宗務総長は話している。本堂や庫裡が壊滅状態になった寺院は住居用に使用したいとしており、また仏像や荘厳具などの保管場所として利用する寺院もある。立ち入り禁止地区にある寺院は、機材の搬入が可能となるまで一週間ほど待ってから建設にとりかかる

▽現在までに次の十五カ寺がプレハブ建設を申し入れている。【兵庫県第一宗務所第一教区】八王寺（兵庫区）満福寺（長田区）東福寺（中央区）永昌寺（兵庫区）禅昌寺（東灘区）向栄寺（東灘区）月照寺（明石市）【同第二教区】宝泉寺（宝塚市）福寿庵（川西市）楊林寺（宝塚市）慈眼寺（伊丹市）喜音寺（宝塚市）東明寺（川西市）【大阪府宗務所第五教区】東光院（豊中市）南昌寺（豊中市）

▽宗務庁は二十六日、被災地への義援会として一千万円（内訳は両大本山から各三百万円、宗務庁から四百万円）をNHKに寄託した。この日は宗務庁の課長はじめ男女職員が都内十カ所で街頭托鉢を行ない、集まった義援金も一緒にNHKに届けた。

実業

神戸と大和郡山の二重生活

●**ウイラ** 異人館街で知られる神戸市中央区北野町のスリランカの民芸品と食事の店・ウイラの北嶋泰観店主夫妻は、兵庫県南部地震のあった翌十八日、神戸を脱出し、北嶋氏の父親・正治氏のいる奈良県大和郡山市小泉二三五に避難した。北野町から阪急電鉄の西宮北口までは、徒歩で七時間を要しての苦難の行程であった。十七日の夜は北野小学校に逃げ、グラウンドで一夜を明かしたが、三分間おきの余震の恐ろしさに眠れず、昨年から心臓病を患った妻を助けるため、とりあえず神戸から離れることを決断した。北野町は、被害の大きかった沿岸部に比べ倒壊した一般家屋は殆どない。しかし、重要文化財の「風見鶏の館」で、レンガ製の煙突が壊れたように、ウイラも屋根の瓦がズレたり、建物の壁が落ち、中の商品の三割ほど倒れた。同店は、中外図書室で紹介している『ダンマパダ』の邦訳を自費出版している。北嶋氏は、このシリーズだけは、どうしても続けたいのでと、十九日から二十日にかけて車で再び北野町に入り、大和郡山市に持ち出すことに成功した。北嶋氏は『ダンマパダ』の説かれている仏陀の教えの一節「危機に面した時ほど、自分の心を明るく持っていく」ことに従って行動した。「このような状況化では、頼れるのは自分だけという気持ちを失ってはなりません。外国人は、その日のうちに友人を頼って神戸から避難しました。被災地の人にとって大切なことは、衣、食、住の確保であり、まずは疲れた体を休ませて、平静さを取り戻すことです。今こそ仏教の教えが必要な時ではないでしょうか」と北嶋氏。氏は、二十四日にも北野町に帰り、店の後かたづけをした。「これからしばらくは、北野町と大和郡山市を往復する生活が続くでしょうが、この店を続けるかどうかは、一、二ヵ月ほど様子をみたい」と、恐怖の体験からの再起を力強く語っていた。

天台

仏青のめざましい活躍

●**天台宗** 兵庫仏青では加古川市の常住院を拠点に、幹栄盛寶生院住職、小杉映道常住院副住職らを中心にして、連日地震被災地での救援活動が展開されている。組織として活動を開始したのは二十三日のこと。その活動方針は、

大前提として「兵庫教区に組織ができたところを拠点にして、周囲の方々を援助してゆこう」ということ。そして、「今後、被災者の希望するものが変わってくるだろう。そのニーズに応えるように活動してゆこう」ということだ。また、「この活動は、必要がなくなるまで、息長く続けてゆこう」ということ。当初は、兵庫仏青の七、八人が中心となって活動していた。最初の活動は水を運ぶことであった。とにかく水が不足しているということで、かなり危険な地域にも入り込んで水を配ったという。それから、物資、カップラーメンなどの食料、そしてストーブ、下着類など緊急物資を調達し、配って歩いた。二十五日頃から温かいものを食べたことがないという声が出始め、二十六日から炊き出しで薪を焚いて、ご飯、粕汁、うどん、味噌汁などの炊き出しを、兵庫区の能福寺境内と長田区の丸山中学の二カ所で千人の避難の人々に配っている。この炊き出しはしばらく続けられる。二十六日には、岡山教区からも協力隊が駆けつけ、十四、五人が加わった。二十八日からは、兵庫教区の寺庭婦人会や兵庫教区の住職、そして檀信徒からの応援も参加してゆくことになる。当初から活動している兵庫仏青のメンバーにも寝不足など疲れが出てきたようだが、他教区などの協力も増えてきて一安心といったところ。現場で活躍する幹栄盛氏は、「現場に立つと地獄をみたような気持になる。しかし、被災の方々の気持が明るいのは驚かされます。『助かったんだから』と言いながら懸命に動かれている様子を見ると、逆に私たちの方が励まされます」と語っていた。

各教区で托鉢を

▽宗務庁の地震災害特別救援本部本部長の杉谷義純総長と副本部長の小林隆彰延暦寺執行は、地震発生から八日後の二十四日、被災地の救援慰問に訪れ、目に余るその惨状に驚いたようだ。当日は、明石市、神戸市垂水区、兵庫区、中央区、長田区、灘区、西区などの十二カ寺を巡回。最後の寺院の慰問は午後十時前になり、午前一時頃に帰山した。小林執行は、「一見にしかずで、総長ともども現地の手のつけられない惨状に驚いた。被災寺院を回って被害の状態を知り、救援物資も寺を通じて被災者に届くよう手配している。広く一般の被災者に対しても義援金によって微衷を表したい」と語っている

▽地震災害特別救援本部では、二十六日に対策会議を開き、今後の救援の展開について協議し、以下の事項を決定した。1すでに各寺院に、被災寺院及び檀信徒の復興、救援を目的とした救援金の依頼をしているが、この運動が各教区で檀信徒や仏青連の自主的な活動に展開している。再度、この救援募金の呼びかけを行ない、寺院だけでなく檀信徒等の救援募金活動の展開を求める2各教区、寺院等に救援活動の一環として、托鉢等の実施協力をよびかける

▽延暦寺で二十四日に予定されていた大震災犠牲者の慰霊法要は、二十五日午後三時からに変更になり、延暦寺阿弥陀堂で、梅山圓了座主を導師に、一山住職が出仕し営まれた。

今こそ伝教大師の精神を

▽近畿教区の大阪府和泉市・蓮華院（弓削俊暢住職）では、震災地に近いことから、すぐに消火活動に出発。発生直後から周囲に呼びかけて、オートバイ六台で水などの物資を運ぶ活動を連日続けている。また、現在、寺を被災者に提供して、老人を中心とした二家族を預かっている。蓮華院内の寺族らは、病院に見舞いに出かけたり、被災者の葬式の手伝いに出かけているという。弓削住職は、「灯籠や地蔵が倒れた、とそんなことを言ってきた寺があるが、人命こそ大事なんだ。順番をまちがえたらいかん。寺を直すことなど後でよい。まず自分でやらなんだらわからん。まずは、檀信徒と被災して困っている人だ。『己を忘れ他を利する』という伝教大師の精神を忘れてはならない」と語っている。各寺院で自主的な救援活動が続いているようだ。

必ず立ち直ると信じて

▽律院（叡南俊照住職、大津市坂本五ノ二四ノ一三）の叡南阿闍梨は、神戸や芦屋、明石などにいる約百人の信者の安否に心を痛めている。四、五人からは電話で無事が知らされたようで、「必ず立ち直れるものです。めげずに心を取り直して頑張ってください」と声をかけたようだ。叡南氏は「なんとかこの場面を、ゆっくりと地に足をつけて歩んでいただくことが肝心です」と語っている。

浄土

救援・復旧に全力

●**浄土宗** 神戸市兵庫区松本通四丁目の願成寺（浜田諭稔住職）は、今回の兵庫県南部地震で最も災害規模の大きかった地域にある。寺の周囲は火災で焼け野原となっており、犠牲者の数も多い。同寺では本堂は倒壊を免れたが、激しい揺れのために内陣は壊れ、壁は剥げ落ち、戸も外れている。しかし、本堂は付近の避難所に開放され、寺族も一緒に本堂で避難民の生活を送っている。近くの寺院が鉄筋コンクリートの新しい建物でびくともしていないのに、門を閉ざして避難民を受け入れていないのとは対照的に、境内は復旧の活気に溢れ、炊き出しの人や町内会の世話人などがせわしげに行ったり来たりしていた。同寺の若住職は風邪をひいていて地震前から臥せていた。庫裏は外部も壁がはげ落ち、傾いているが、内部は家財道具などがめちゃめちゃに飛び散り、足の踏み場もなく全滅状態。若住職はタンスの下敷きになって頭に怪我をした。また墓地も全壊し、平通盛と妻・小宰相の局の塚も無惨に倒れていた。同寺では十年前から仏青で、二月十四日のバレンタインデーに、チョコレートを先着五百人にプレゼントする「ロマン法要」を営んでおり、今年も案内状を印刷して送る手はずになっていたが、大地震のため、中止にせざるを得ないという。墓地の前の路地は大きな横揺れで家がずれ、道をふさいでしまっていた。中学生や若い女性の遺体も収容されている。長女・麻起子さんは、避難民や檀信徒、地元の被災者の対応に大わらわであった。

大本

信徒との連絡を密に

●教団では十七日の兵庫県南部地震の発生後、京都府亀岡市天恩郷の本部内に直ちに「兵庫県南部地震災害救援対策本部」を設置。数次にわたる災害救援隊を現地に派遣して救援物資を届ける一方、被災地に住む大本信徒の被災状況の把握に努めてきた。被災地にある神戸本苑（神戸市兵庫区会下山町一ノ二ノ二七）の建物は残念ながら使用不能な状態となったが、信徒についてはこれまでにほぼ全員の消息をつかみ、すべて無事を確認した。▽対策本部では二十五日までに第五次の救援隊を派遣した。二十三日に派遣された第四次救援隊では、隊長として対策本部長の植村彰大本本部長が現地に入り、救援隊の指揮、被災者の激励等にあたった。救援隊は主として二トントラックで被災地へ入り、運び込んだ救援物資は区役所などで降ろすのではなく、避難生活を強いられている被災者の手元に直接、届けるようにしている。地震発生から十日余りが過ぎ、被災者の疲労が心配されるところ。避難生活は地域住民の共同生活であり、救援物資を信徒だけに配布するわけにもいかないが、対策本部では、「被災した信徒との連絡だけは密にしていきたい」としている。

真宗

まずは仮設の本堂を

●**本願寺派** 今回の兵庫県南部地震では多数の寺院が崩壊し寺族や門信徒らの尊い人命も多数犠牲となった兵庫教区（土基謙教務所長）の惨状がクローズアップされているが、大阪教区（吉川孝臣教務所長）でも全壊などの激しい被害は少ないが本堂が傾くなど何らかの形で被害を受けた寺院が百十カ寺にもものぼっており、決して被害状況は軽微とは言えないようだ。同教務所が入る津村別院（輪番＝吉川教務所長）の金林哲乗副輪番の話では、十七日の大地震の影響で別院のガラス約百枚が割れ、屋根瓦も約五千枚が落下するなどの被害が出た。また、教務所に設置された災害対策本部が現在、職員を派遣して被災寺院の調査を行なっているが、大阪市内、八尾、東大阪、大東、守口、門真、寝屋川、交野、茨木、高槻、摂津、吹田、豊中、池田、箕面、堺、高石、貝塚、岸和田の各市、三島、豊能、泉南の各郡にある百十カ寺もの寺院に被害が広がっているようだ。宗派では、兵庫教区と共に大阪教区にも見舞金を送ろうとしたが、同教区は「とにかく今は兵庫教区を先に」とこれを辞退し、吉川所長、三原暁誠教区会議長、野村晃明組長会長の三氏が宗務所を訪れ、宗派に兵庫教区への見舞金三百万円を渡した

▽「兵庫県南部地震の被災者救援にご協力をお願いします」－阪急電車四条大宮駅頭に、今回の震災の被災者救援のため街頭募金に立った中央仏教学院（三宮義信学院長、京都市右京区）の学院生らの声が響いた＝写真【写真は省略】。本派僧侶を目指して約二百人の学院生が研鑽を積む同学院の学友会（福嶋ニール圭治会長）では、OBや学院生の友人知人がたくさんいる今回の神戸市など兵庫県南部の震災に対して学院生にボランティアを募り、二十四日から二十九日まで六日間にわたり阪急四条大宮駅と西院駅の駅頭で募金活動を行なっている。西院駅は午前七時から同九時、午後三時から同六時までの一日二回、四条大宮駅では午後一時から同六時までの一日一回、各々学院生約十人が街頭に立って京都市民らに救援募金を呼び掛けている。今回の募金活動で集めた義援金や学院内で集めた義援金とあわせて宗派を通じて兵庫教区、神戸市などに送る。この募金活動には三宮学院長ら学院の講師らも学院生と一緒に街頭に立っており、同学院長は「苦しんでいる人達、自分の身を賭けて救援する。この姿勢はこれから僧侶に求められる資質。学生達には将来のよい勉強になります」と語っていた。また、学友会の竜尾浩月氏（研究科）は「今回はボランティアの呼び掛けに応じる学院生の数が多かった。みんな積極的に支援に立ち上がってくれました」と学院全体で支援ムードの盛り上がりを歓迎。今回の震災で学院生の中には自坊の本堂や庫裡が倒壊した人達もいるそうだが、竜尾氏ら学院生は「本来ならば寺院はこうした災害時に被災民らの心のよりどころとなるべきなのに、今回はその寺院が被災してしまった。僧侶、僧侶を目指すものとして何かせずにはいられない気持ちです」と寒風吹き荒む街頭に立ち続けている

▽本山宗務所の本願寺聞法総合施設に勤務する山本政秀氏が住職を務める兵庫教区神戸西組の教信寺は、今回の震災で東灘区とともに最も大きな被害を受けた長田区にあり、同寺も本堂と庫裡が全壊するという大きな被害を受けた。しかし、先述の中央仏教学院生が言うように、寺院というのは昔からこうした災害の折の被災民らの心のよりどころとなる場所、山本氏も「被災された門徒さん達はお寺を頼りにされています。その切なる思いに何とか応えたいのですが...」と悩んでいるという。宗派は、二十四日から宗務所に勤務する男子職員百五十人を五人ずつ三十班に分けて被災地、被災寺院の復旧の救援に派遣している。打ち拉がれた被災寺院の住職や被災民の人達にとってはこうした人的、物的な支援は復興への大きな支えとなることは間違いないが、ある教区内の住職は宗派に「一日も早くプレハブでよいから仮設の本堂を建ててやってほしい。拠点があれば、被災された門信徒の人達もそこへ集まり、今後の復興について住職と門信徒が力を合わせて立ち上がるができる」と要望していた。

救援活動で意見交換

▽ところで、この編集会議の席上、話題となったのが数多くの被災者を出した兵庫県南部地震に対する義援活動の問題で、様々な方向から意見交換をしていた。その中で、教団、僧侶が今後、どのような意識で被災地、被災者に対し義援活動を進めるかに意見が集中した。中でも注目されたのは、被災地で被災した寺院と同じく被災している門信徒と地域住民との関係をどう捉え、支援していくかという問題であった。今後の支援活動は、約三十万人と言

われている避難者に対し、生活の不安を取り除いてあげるような活動はできないだろうか。それを全宗門挙げて支援していく方法が望ましいという、意見が続出。具体的な例として1本願寺隣接地を利用して仮設住宅を建て、住居や仕事が確保できるまで本願寺全体で支援していく2百を超えている被災寺院の空き地境内地に仮設住宅を宗門予算、あるいはボランティアを募集し建設。門信徒や地域住民の入居者を募り、住居や仕事が安定するまで、宗門挙げて当該寺院を支援していく－という意見がまとまった。こうした支援活動こそ、平成十年に迎える蓮如上人五百回遠忌のテーマ「変革（イノベーション）」の中身ではないかという意見があった。寺院と門信徒、地域住民が一体となって、被災という共通の問題を克服しながら生き抜ける環境を宗門全体が応援、支援していく。蓮如忌では百九十八億円という予算が計上されていることからみて、決して不可能ではなく、こうした支援活動によって蓮如上人の精神を継承した五百回遠忌円成の中身となるのではなかろうか、との意見が出された。しかし、編集委員の一致した意見はこうした災害救援活動について一貫して話し合い、検討していく機関が中央になく、意見を上申することが不可能であるということであった。雑記子は、この会議の様子を取材して、間もなく開かれるであろう災害対策のための臨時宗会の議員、総局の目に触れることを願う。

難波別院が遺骨無料安置

●**大谷派** 難波別院（中林徳雄輪番）は、兵庫県南部地震で犠牲になった市民の遺骨を無料で預かることを決めた。対象は、家屋の倒壊、焼失などで遺骨の安置場所に困っている被災者。安置場所は難波別院本堂で、引き取りの時期は相談の上

▽地震の被害状況で調査の遅れていた山陽教区灯籠少々壊れる

▽源通寺（藤沢昭住職、同）＝壁にヒビ

▽真宗寺（邨上文圓住職、同）＝墓石、灯籠少々壊れる

▽明圓寺（本多元正住職、同）＝壁少々崩れる

▽正岸寺（岸本孟住職、同）＝壁が崩れる

▽西蓮寺（笹倉成文住職、同）＝壁にヒビ、瓦少し落ちる

▽永徳寺（島直樹住職、兵庫県高砂市）＝本堂壁と墓倒れる、土台傾く、ガラス割れ

▽応順寺（渋谷義清住職、同）＝本堂、庫裡にヒビ、瓦落ちる

▽常念寺（赤松典生住職、同）＝本堂壁ヒビ、山門ズレ、墓石倒れる

▽傳法寺（平山誠住職、同）＝墓、灯籠倒れる

▽養源寺（鷺沢式實住職、兵庫県姫路市）＝墓倒れる、壁にヒビ

▽能邨英士宗務総長は大阪、山陽両教区の全寺院へ災害見舞いを郵送した

▽近畿宗教婦人連盟（委員長＝木辺美子前裏方）が九月二十七日、事務局を置く大谷婦人会館で同連盟初代会長の大谷智子裏方の七回忌と光暢法主の三回忌を営む。追弔会では三宅恒子同連盟前委員長（金光教泉尾教会）の「一年祭」も執行するほか、地震の犠牲者も追悼する

▽全身を活性化する手技療院を開いて、ダスキンをはじめ大手企業にファンの多い光輪療術学院（高橋利枝院長＝光徳寺寺族、大阪市中央区）。高橋院長ら同学院のスタッフは近々、震災地に入り、疲弊した市民に無償で療術を施す。この療術は「脊椎矯正リンパ血液循環療法」と呼ばれ、全身の経絡療法に加えて、背骨、神経、腹部へ快圧手技の刺激を与えるもの。「避難所へ出かけ、震災でクタクタになったお年寄りや体調の悪い人たちなどできるだけ多く人に療術を。心身ともに一時でもリラックスしてもらえれば」と張り切っている

▽宗門関係校・光華女子学園（阿部恵年理事長）でも十九日から被災者への義援金を学内で募り出した。中学、高校、大学に各々、義援金箱を設けて協力を呼びかけている。

律宗

壬生狂言で犠牲者を追悼

●別格本山壬生寺

▽松浦貫主はこのほど、兵庫県南部地震の犠牲者を供養しようと、亡くなった約五千人全員の名前を染めた壬生狂言の衣裳を作ることを決めた。四月二十一日から同二十九日まで上演される春の壬生狂言でこの衣裳を使い、犠牲者を追悼する。同寺には天明八年（一七八八）の大火で焼死した人の菩提を弔うため、名前を染めて奉納された衣裳のうち、四点が保存されている＝写真【写真は省略】。松浦貫主は「昔から死者の追善のため、衣裳を奉納するという風習は各地にみられますが、戦前、壬生狂言の衣裳は大部分がこれらの衣裳を活用したものでした。四月の壬生狂言に間に合うように準備を進めたい」と語っている

▽松浦貫主はこのほど、兵庫県南部地震の被災地に百万円の義援金を贈った。

神社界

本殿を解体修理

●地震で大きな被害が出た西宮神社（吉井良隆宮司）では、地震により本殿の柱が傾いていたが、近く遷座祭を斎行して、神霊に権殿遷座祭を執り行なうことになった。倒壊や半壊といった大きな被害でなく、一見ではわからないくらい柱が傾いただけで、その処置が思案されていたが、結局解体修理を行なって完全な姿に戻すことになった。国の重文である表大門の損傷は調査の結果軽微なものとわかったが、同じ国の重文の大練塀は大きく損壊し、修復には時間がかかりそう。境内社も、南宮神社が全壊した＝写真【写真は省略】＝のをはじめ、壊滅状態のため、完全新築が急務となっている。

新宗教

車二台で救援隊を派遣

●観音聖教 神戸をはじめ関西地方に数多くの聖衆がいる観音聖教（妹尾公運琳主）＝総琳壇・岡山県浅口郡鴨方町小坂東二八一五ノ二＝では、十七日の初観音の行事を早めに切り上げて、救援物資を集め、十八日午前五時、妹尾匡海参議総長ほか二人が乗用車二台に分乗して被災地・神戸へ入った。到着したのは午後七時半で避難所を訪ね救援物資を届け、同時に被災地に居住の約四十世帯、百六十人の消息を確認した。匡海参議総長によると、被災地に到着した当時はまだ火災中で、木などが倒れてくるような状態だったという。こうした中で、災害の酷かった神戸市長田区内に在住の聖衆はカスリ傷程度で全員無事だった。しかも、家屋の火災や倒壊からも逃れたという。また、匡海参議総長によると、去年の暮れ、公運琳主から今年は地震があるから十分な備えをしておくようにとの指示があり、地震に備えた日常生活を送っていたという。現在は神戸市内の聖衆間の連絡網も整い、他の犠牲者の冥福を祈りたいと、総琳壇へ写経の申し込みがあるという。

真言

太融寺に本部を設置

●高野山 震災の被害状況は本山から四班に分かれて派遣した職員らによって、かなりの情報が集まってきている。二十六日にはひとまず本山に引き揚げ、二十七日に内局会を開いて今後の救援策を話し合った。兵庫宗務支所下の

寺院については被災状況の調査が遅れているため、今後もさらに続けるという

▽今回、とくに被害がひどかったのは二年前に建てたばかりの本堂が全壊して全焼した理性院（神戸市東灘区）、同じく全壊して全焼した弘誠寺（神戸市須磨区）のようだ。理性院の西藏全祐住職とその家族は、親類でもある東光寺（西宮市門戸西）に身を寄せている。西藏住職に会った本山関係者の話では、「少し残れば未練も出てくる。何も無くなってむしろよかったかもしれない」と語っているそうで、自分の寺のことを後回しにして被災地でボランティア活動を積極的に行なっているという。またその本山関係者は、「西藏住職はお父さまは入院しているようですが、そんな話も私たちにいっさいしませんでした。とにかくその姿には頭が下がります」と話していた

▽救援のためのボランティアについては教学部が中心となり、太融寺（大阪市北区）に本部を設置。前線基地として西宮市の東光寺があてられ、さらに現地には灘区の龍王院（＝醍醐派）、中央区の聖徳院、兵庫区の金光寺、須磨区の勝福寺、北区の無動寺を拠点にしている。太融寺はじめこれらの寺に宿泊して、ボランティアを行なう態勢で、毎日だいたい三十人くらいがボランティアに携わっており、二十五日は五十六人が集まった。まだまだ人員が必要のようで、長期的かつ継続的に進めていくためさらに希望者を募っている。

専修学院いつでも出発と

●**智山派** 智山専修学院では、学院生二十五人に教学部職員が引率して、兵庫県南部地震の被災地を訪れる準備をしているが、出発については大本山中山寺の要請を受けてからということ、日付は未定とのこと（二十六日午後現在）。

本山で地震物故者の回向

●**御室派** 兵庫県南部地震は五千人を超える死者を出すなど未曾有の大惨事となった。総本山仁和寺では二十五日午前、同寺金堂において「阪神大震災物故者各霊追悼法要」を営み、物故者の冥福を祈った。追悼法要は、吉田裕信門跡の導師により午前九時半から始まり、倉信隆源執行長はじめ山内住侶が総出仕した。また、山内職員も理趣經の読經の続く中、次々と焼香、回向した＝写真上【写真は省略】。今回被災した阪神地区には同派の末寺だけでなく檀信徒も多く、同派では現在、全国の末寺に義援金を呼びかけている。義援金に関しては、臨時に設置された「宗務所総務部災害対策係」が窓口となり、その送金期日は二月二十日まで。詳細については同派宗務所、電話〇七五（四六一）一一五五へ。

救援本部を設置し勧募

●**豊山派** 豊山派では、本紙記事欄で報じている通り、兵庫県南部地震被災者救援のための本部を宗務所に設置した。本部長は、川田聖定宗務総長で、担当部長は杉山康信教化部長。豊山派では「兵庫県南部地震救援勧募趣意書」をつくり、全国の寺院、檀信徒に勧募を呼び掛けている。勧募趣意書は次の通り。「寺院住職各位におかれましては、平素より正法の興隆と宗威の発揚に特段のご尽力を賜り、まことにありがとうございます。さて、このたびの兵庫県南部地震では、都市の過密集中の弱点を露呈し、その被害はまことに悲惨の極みであります。ここに被災され、或いは犠牲に成られた方々に対し、衷心より哀悼とお慰めの意を表します。すでに、昨年発足いたしました真言宗豊山派福祉基金にて、応急的に義援金三百万円を寄託いたしました。しかし、新聞テレビ等で報道されているように、ますます被害増大の傾向があり、援助を継続する必要がございます。つきましては、宗祖大師の濟世利人のご精神にのっとり、行願の菩提心を実践すべく、宗派を挙げて援助の手をさし延べたいと存じます。どうぞ、この志をお汲みとり下さいまして、よろしくご協力を賜りますようお願い申し上げます。平成七年一月十九日 宗務総長 川田聖定」。また、「早々に第一次義援金を寄託したいと存じますので、なるべく二月十五日までにご送金

いただくようお願いいたします」と追記している。豊山派内におかれた救援本部の構成は次の通り。本部長＝川田聖定宗務総長、三津田弁秀総本山長谷寺事務長（各山会関係）、小野塚幾澄教務部長（仏青・仏婦の管掌）、若槻繁隆総務部長（全仏関係、四十八支所統括）、浅井侃雄財務部長（予算処置）、杉山康信教化部長（福祉基金）、三方秀峰総本山長谷寺東京出張所長、中正宣・岡本教雄秘書課長（マスコミ・対外等）、犬塚正秀管財課長、高橋清隆事業課長（福祉基金）、小倉秀清教務課長（仏青・仏婦）、伊東聖隆豊山仏青会長、高橋アイ豊山仏婦会長。

法華

岩間管長が「お見舞い」

●**日蓮宗** 宗門寺院にも甚大な被害（本堂等の全壊六カ寺、半壊五カ寺以上、住職死亡一人、檀信徒の死亡多数＝二十三日現在）をもたらした兵庫県南部地震では、地震発生当日の夜に奥邨正寛宗務総長が現地に飛んだのはじめ、十八日までに、奥邨総長を本部長、加賀美泰全庶務部長と渡辺一之財務部長の二人を副本部長とする「兵庫県南部地震日蓮宗救援対策本部」が宗務院（事務局直通電話＝〇三・三七五四・四四二二）に設置され、被災地はもとより、各宗務所との連絡と対応に追われた。救援対策本部のスタッフは、本部長、副本部長のほか、事務局課長に長谷川義彰総合企画部広報調査課長（常勤）と小林正雄庶務部寺院僧籍課長（非常勤）、事務局員に佐々木康文庶務部庶務課書記、高久知子総合企画部事務員の四人で構成されており、十九日と二十日には、早くも救援対策本部の長谷川課長と総合企画部の渡辺言之主事補の二人、また二十二日から二十五日までは護法伝道部の部員四人と大阪日青会員らがそれぞれ被災地に入り、被害状況の収集にあたった。また救援対策本部の話によると、奥邨総長は二十日付で全国の宗務所長宛に、次のような内容の「宗門被災寺院及び被災者義援金勧募のお願い」を送付した。「一月十七日早朝に発生した兵庫県南部地震では、宗門関係でも兵庫県東部管内を中心として、本堂の倒壊等、また教師、檀信徒にも多くの被害が及んでいる。早速、兵庫県南部地震日蓮宗救援対策本部を宗務院内に設置し、小衾、本部長として当該地震対策に当たることとした。今後、被災は増大する見込みであり、宗門としても一月二十日、全国教区長各聖に集まっていただき、協議した結果、全国より義援金を募集し、寺院の再建復興、本宗関係の被災者の生活復興のための支援をする所存である。貴職におかれては、勧募の趣旨を理解され、貴管区宗務所内に兵庫県南部地震日蓮宗救援対策支部を設置し、義援金受付窓口の開設を依頼申し上げる次第である。なお、勧募のお願い書はこの後、全国の寺院・教会・結社宛に直接送付致したく、何卒ご了承下さい」(要旨)。この文面にもあるように、宗務院ではこの後、二十三日付で全国五千五百カ寺の宗門寺院（教会・結社を含む）に対し、直接、郵送にて「義援金勧募のお願い」を送っている。義援金の払い込みは原則として各管区宗務所経由だが、直接払い込む場合は、次の金融機関を利用してほしいということであった。１．郵便振替＝〇〇一九〇－五－四八二五２．富士銀行（大森支店）＝普通二〇二二八八３．三菱銀行（池上支店）普通〇一五四八一。口座名はいずれも「日蓮宗宗務院財務部」まで

▽また岩間日勇管長（身延山法主）は二十三日、被災地の近畿教区宛に次のようなお見舞状を送った。「平成七年一月十七日未明、兵庫県南部を中心とする大地震は瞬時にして多くの建物を倒壊し、それにとまなう大火災により、平穏な市街は一朝にして廃虚の様相を生ぜじめました。その惨状は言語に絶するものであります。本宗寺院及び檀信徒におかれましては、住職をはじめ、檀信徒の尊い生命を失い、また多くの堂宇・家屋が倒壊焼失、幾多の教師・檀信徒が罹災されました。被害は兵庫県南部のみならず、近隣各地まで広く及んでおります。亡くなられた方々に慎んで哀悼の意を表しますとともに、罹災された方々に対しまして、深き心痛の念を禁じ得ません。ここに心よりのお見舞いを申し上げますとともに、一日も早き復興をお祈り致します」。
